

偽札工作 明かされた戦争の闇

旧陸軍 秘密研究所員が証言

第2次世界大戦中、川崎市に設置された旧日本陸軍の秘密研究所「登戸研究所」で、元研究員が、朝日新聞の取材に対し、当時中国の経済混乱を狙って実施された偽札製造の実態を語った。同研究所は現在、明治大学の生田キャンパス（川崎市）になっており、偽札製造にあたった5号棟は21日から解体が始まる予定。「負の歴史」が刻まれた「戦争遺跡」の消滅を前に、元研究員が重い口を開いた。（三浦英之）

45億元分、中国へ運搬 経済混乱狙う



▲登戸研究所資料館所蔵の偽札
◀川津敬介さん



偽札工作の実態を明らかにしたのは、当時研究員として偽札の製造や運搬に携わった栃木県小山市の元中学教師川津敬介さん（88）。東京府立工業学校（現・都立工業高校）の「製版印刷科」を卒業し、17歳で研究所に入所。「第三

登戸研究所
1939年設立。正式名は「第九陸軍技術研究所。細菌やウイルスを使った「生物兵器」や、気球に爆弾をつけて米本土を狙った「風船爆弾」などの開発が行われた。偽札工作は設立当初から実施され、5元札から200元札まで総額約

45億元分を製造。約25億元分が中国での物資買い付けなどに使われたとされる。中国経済への影響については、日本の研究者の間で「多大な衝撃を与えた」という見解と、「中国側が対抗策として高額紙幣を流通させたため、日本の偽札（小額紙幣）は無力化された」とする見解などに分かれている。



刻まれた負の歴史 解体前に見学会

解体が決まった5号棟では20日、最後の見学会が開かれ、歴史愛好家や研究者ら約600人が詰めかけた一写真。5号棟は1940年前後に建設された約700平方メートルの木造平屋建てで、偽札製造用の部屋などが公開された。明治大は図面や映像を保存した上で、21日に解体工事に着手し、跡地に農学部関連施設を建設する方針。

科」と呼ばれる偽札製造部門に配属された。

証言によると、第三科では、本物の紙幣を「A券」、偽札を「B券」と呼び、最大約130人が「製紙部門」「製版部門」「印刷部門」などに分かれて働いていた。中国の偽札だけでなく、スパイが使うソ連の偽パスポートなども作っていたという。

作業の手順は、①中国の紙幣を写真で乾板（感光性の銀塩乳剤を塗ったガラス板）に写し取る②そこに光を当て③1畳ほどの紙に拡大投影④映し出された紙幣の絵柄や文様を研究員が筆で紙の上に描く④紙を縮小することで精密な偽札用の原版を作製——というものだ。紙幣は全て本物と同様に凹版で印刷し、真新しいと怪しまれるため、ニンニクの汁やマーガリンなどで汚してから運搬用の木箱に詰め

た。1942年に日本軍が香港にあった国民党政府の紙幣印刷工場を接収した後は、「本物」の版を運び込んで「偽札」を印刷していたという。運搬は主に陸軍中野学校の出身者が担当し、長崎から船で上海に送った。第三科の研究員も1人付き添うことになっており、川津さんも1度だけ上海に同行した。「暗黙の了解として、任務の途中で偽札を2、3束もらえることになっていたので、運搬係は人気があった。任務終了後、旧満州国や朝鮮半島を経由して研究所に戻ったが、登戸研究所員は特権階級で、身分証を見れば、汽車や船舶は乗り放題だった」と振り返る。

敗戦後はすぐに資料の焼却が命じられ、ほぼすべての資料を燃やした。戦後は小山市で中学校の教員を務めたが、偽札製造については口をつぐんできた。「偽札作りは戦時中、どの国でも行われていたと認識している。後悔してはいないが、戦後に生きる多くの人が過去の実態を知り、これからの日本の在り方を考えるきっかけにしてほしいと考えている」と話している。

偽札製造、40年ごころ「完成」 敗戦後も周囲に話さず

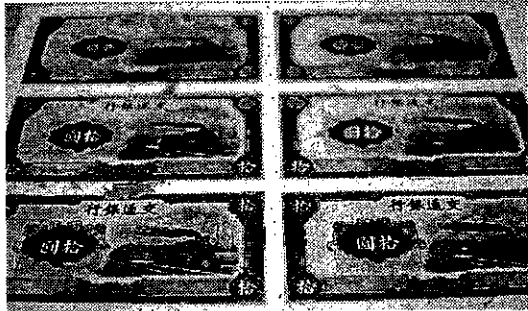
旧陸軍「登戸研究所」研究員・川津さんに聞く

日中戦争中、中国の経済混乱を狙って大量の偽札がつけられた旧日本陸軍の秘密研究所「登戸研究所」（川崎市）。戦後65年が過ぎ、栃木県小山市で中学教師を勤めた元研究員川津敬介さん（88）に顔写真には「日本の戦時中の実態を若い世代に伝えてほしい」と、朝日新聞の取材に初めて応じた。

（三浦英之） 21日の朝刊社会面に関連記事



偽札がつけられていた部屋で説明を聞く見学者ら＝川崎市多摩区⑤5号棟で製造されていた偽札（登戸研究所資料館所蔵）



東京府立工業学校（現・都立工業高校）の「製版印刷

緯は



「偽札」に携わった経

科」で印刷技術を学んだのがきっかけです。陸軍から「印刷技術に秀でた若者が欲しい」と言われ、当時は新宿・百人町にあった「陸軍科学研究所」に17歳で入りました。任務は偽札づくり。中国の偽札やソ連の偽パスポートを造るだけでなく、進軍先の東南アジアで、日本寄りの新政府が樹立された時に使うための紙幣の研究も行っていました。学校の美術の先生を呼び、アンコールワットの図柄などを描いてもらったりしていたんです。

戦後、研究所は45年4月、第三科は空襲を逃れて研究所ごと福井県に疎開しました。現地の製紙工場を借り上げましたが、機器の搬入がうまくいかず、そのまま敗戦を迎えました。第三科の研究員はその後、印刷機械を払い下げてもらい、名古屋市内で印刷会社を立ち上げました。私もしばらく携わり宝くじなどを刷っていたのですが、やはり「武士の商法」で経営が行き詰まったため、私は栃木県小山市の中学校の英語教員になりました。偽札造りについては周囲に話したことがなく、知っている人もほとんどいません。

研究所での生活は1939年に研究所が登戸に移りましたが、研究内容は

変わらず、「第三科」（偽札製造）に配属されました。所内では秘密保持が徹底され、「第一科」（風船爆弾）や「第二科」（生物兵器）が何を研究しているのか、当時はまったくわかりませんでした。一方、研究員の待遇は非常に恵まれていて、勤務と同時に大学に通うことが認められていました。私は日大の夜学に通い、教員免許を取得しました。軍の研究所でしたので、給料も良く、物資もあふれていました。

戦後、年一回は元研究員たちが登戸で集まっていますが、約10年前からはそれも途絶えました。かつての研究所の建物がなくなることには感慨はありません。時代の流れだと思っています。

当初は失敗の連続でした。紙幣は極めて精密にできていたので、インキがうまくのらなかつたり、図柄が少しでもぼやけたりすると、すぐに偽札だとばれてしまう。試行錯誤の結果、40年ごころにはずいぶんは偽物だとわからないような偽札をつくれるようになった

偽札づくりの実態は

偽札造りについては周囲に話したことがなく、知っている人もほとんどいません。